

令和5年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

I 自己評価

1 学校教育目標	歴史と伝統を誇る学校として、校訓「あかるく、さとく、たくましく」を旨とし、「知・徳・体」の調和のとれた人格の形成を図るとともに、生徒一人一人の個性的で多様な進路の実現を図る。		
2 スクール・ポリシー	『育てたい生徒像』 グラデュエーション・ポリシー（GP） ・基礎的・基本的な学力を身に付け、主体的に課題解決に取り組む生徒 ・基本的生活習慣を身に付け、自分と多様な人々の生命の安全と互いの人権を尊重し、規律を守る生徒 ・自分に適した進路目標を見つけ、進路実現のための学力とコミュニケーション能力を身に付けた生徒	『生徒をどう育てるか』 カリキュラム・ポリシー（CP） ・基礎的・基本的な内容の定着を図るための「学び直し」を実践するとともに、具体的な到達目標の設定と指導内容の重点化を推進 ・保護者との連携を図りながら共感的な生徒理解に努め、ユニバーサルデザイン（不破高スタイル）を基礎とした段階的な支援（New 不破高スタイル）を実践 ・単位制のメリットを活用した5つの類型による教育課程を編成し、進路希望に即した科目選択を充実させ、自己適性の的確な理解に基づく進路目標を実現	『どんな生徒を待っているか』 アドミッション・ポリシー（AP） ・学習活動にコツコツ取り組む生徒 ・部活動や生徒会活動、ボランティア活動に積極的に取り組む意欲のある生徒 ・学校生活に真摯に取り組み、進路実現を目指そうとする生徒

3 評価する領域・分野	◇学校経営	
4 現状、生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート結果では、生徒及び保護者ともに、ほとんどの項目で肯定的な回答が目立ち、好感的に捉えられている。 ・保護者アンケート結果で「分からない」と回答された割合が、昨年と比べて半分以上に減っており、保護者の皆さんが本校に関心を持たれるようになってきている。 ・「本校に入学できて良かった。」と思っている生徒が80%を超えている。 	
5 今年度の具体的かつ明確な重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ◇学校運営協議会を中心に、外部の有識者等の意見を積極的に取り入れ、活性化を推進します。 ◇コミュニティスクールとして、地域との積極的な連携交流を図り、本校の特色を活かした「ふるさと教育」を推進します。 ◇授業規律や基本的生活習慣の確立を図り、全職員が一体となった単位制高校としての学校運営に努め、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業展開及び環境整備を推進します。 ◇生徒・保護者・学校関係者の意見を学校運営に活かし、常にPDCAサイクルに基づき学校改善を行います。また、積極的な広報活動を推進し、学校の教育活動を地域社会等にアピールします。 ◇コミュニケーション能力の向上を図る取組の一つとして「高等学校少人数コミュニケーション講座推進事業」の成果を踏まえ、高校における特別支援教育を推進します。 	
6 重点目標を達成するための校内における組織体制	<ul style="list-style-type: none"> ・学校運営協議会を中心に、外部の有識者等の意見を積極的に取り入れ、活性化を推進する 	
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標	
<ul style="list-style-type: none"> ①地元のこども園・小・中学校との積極的な意見交流を図り、本校のありのままの様子を公開し、率直な意見をいただく。 ②「ふるさと教育」を推進し、学校の教育活動を地域社会等に発信する。 ③コミュニケーション能力の向上を図る取組として「演劇ワークショップ」、高等学校少人数コミュニケーション講座推進事業の成果を踏まえた「通級による指導」等の円滑実施に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ①効果的な地域社会との交流について検証する。 ②マスコミ等への積極的な情報提供やHPの充実を図る。 ③「自立活動」および「自己探求」（学校設定教科）の指導法を研究し、生徒の困り感の解消につなげる。 	

9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価
①地域社会との積極的な連携のため、地元企業や地元大学・専門学校等と連携し、様々な生徒向け講話を実施することができた。 ②メール配信システム等を活用し、家庭との連携を図った。 ③指導計画を修正しながら、円滑に学習内容を実施することができた。	①地元企業・大学等と積極的に連携することができたか。 ②学校の教育活動の内容を積極的に発信できたか。 ③対象生徒に適した指導内容を実施することができたか。	A (B) C D A (B) C D (A) B C D
12 成果・課題	○「自立活動」や「自己探求」において、全職員による校内研修を実施し、職員全体で生徒の困り感に対応するための支援の在り方について学んだ。 ○学校行事の公開や、部活動の発表などを通じて、保護者や地域の方々に本校のありのままの様子を公開するとともに、ご意見をいただいた。 ▲定量的なデータだけでなく、本校の意義が伝わるようなデータの取り方と、その分析をしていけると良い。	総合評価 A (B) C D
13 来年度に向けての改善方策案 ・持続可能な「総合的な探求の時間」の在り方を検討するとともに、垂井町との継続的な連携を模索し、生徒の探求的な学びに位置付ける。 ・「自立活動」や「自己探求」についての校内研修を実施し、不破高スタイルを基礎としたNew不破高スタイルを実践する。		

II 学校関係者評価

実施年月日：令和6年2月6日

<p>【意見・要望・評価等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・演劇ワークショップへの取組では、主体性を引き出すことが、学びの出発点であり、自己肯定感の育成が、教育の出発点であると感じた。 ・学校が開かれている、学校を開こうとしているという印象を強くもっている。生徒たちが認められており、自己肯定感を高める取組が継続され、充実していると感じる。 ・生徒を主役とし、教職員が丁寧に接している姿を見て、個を大切にしながら日々の教育活動を実践していることがよく分かった。 ・ふるさと教育をこれからもより一層進め、地元の企業や事業所との交流の機会を増やし、多くの生徒が地元に残ることを期待している。

I 自己評価

3 評価する領域・分野	◇学習指導	
4 現状、生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等	・生徒対象のアンケートでは、「授業の教え方や説明が分かりやすい先生が多い」、「テストの得点だけでなく、色々な面から学習の評価を行っている。」について、80%以上があてまはると回答している。	
5 今年度の具体的かつ明確な重点目標	◇基礎的・基本的な内容の確実な定着を図るため、義務教育段階までの「学び直し」を実施します。 ◇少人数授業の利点を活かしながら、ICTを活用した学習活動を積極的に取り入れることにより、主体的な学習態度を育成します。 ◇生徒の資質・能力を観点別に評価します。	
6 重点目標を達成するための校内における組織体制	・学校活性化プログラムによる授業研究	
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標	
①基礎的・基本的な内容の確実な定着を図るため義務教育段階までの「学び直し」を実施する。 ②少人数授業の利点を活かしながら、ICTを活用した学習活動を積極的に取り入れる。 ③生徒の資質・能力を観点別に評価し、評価の方法についてさらなる改善を図る。	①学習において、生徒一人一人のつまずきを把握し、学習意欲を喚起させ、生徒の能力の伸びを多面的に捉える。 ②活性化プログラム研修、公開授業週間等を通じて授業改善を行い、生徒の主体性の向上を図る。 ③生徒の学習状況を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点で評価する。	
9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価
①研究授業を計画的に実施し、参観者から指導内容とその支援の在り方について助言をもらい、授業力の向上に努めた。 ②公開授業週間中は、授業見学に取り組みやすい体制を整えた。 ③生徒の学びを多面的な指標で評価し、授業へ取り組む意欲の喚起に努めた。	①学習実態を把握し、生徒の指導に活用できたか。 ②③研修の結果を授業改善に活かすことができたか。	A (B) C D A (B) C D A (B) C D
12 成果・課題	○国語・数学・英語においては、到達度テストとその分析結果から生徒の学力推移を把握することができた。 ○分析結果から生徒が間違えた問題のうち、優先度の高いものから復習課題を配信し、取り組ませることができた。 ○定期考査の問題について、「知識・技能」を問う問題に偏ることなく、「思考力・判断力・表現力」を問う問題について各教科で検討した。 ▲生徒が主体的に活動できる授業展開の研究を進めたい。	
13 来年度に向けての改善方策案 ・観点別学習状況評価を行う上での学校全体としての組織的かつ計画的な取組を行う。 ・生徒が主体的に授業に参加し、工夫における授業方法の研究や授業実践に取り組んでいく。 ・垂井町との継続的な連携を生徒の学びに位置付け、課題解決型学習を推進する。		

II 学校関係者評価

実施年月日：令和6年2月6日

【意見・要望・評価等】 ・スタディサプリや到達度テスト等について、学習指導において色々な学びの成果が上がってきている。また、学び直しを実践し、基本的な学力の定着についても成果が出ている。生徒の話を含めて、学習が成り立ってきている様子がよく分かった。 ・基礎基本の定着と徹底の大切さに向けての実践が、生徒たちに確かな学力をつけ、生活の安定につながっていると感じた。 ・一人一人の学びの実態を把握し、着実に楽しみながら学んでいけるように教職員が寄り添っていることが伝わってくる。
--

I 自己評価

3 評価する領域・分野	◇「生徒指導（教育相談）」	
4 現状、生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等	・生徒対象のアンケートでは、「本校では人間としての基本的なモラルやマナーを身に付けさせようとしている。」について、75%以上があてまはると回答し、「いじめや差別を許さず、厳しく対応している」について、68%以上があてまはると回答している。	
5 今年度の具体的かつ明確な重点目標	◇保護者との連携を密にして、全職員の共通理解・共通行動のもと、身だしなみ・遅刻・授業規律等の学校生活における規範を遵守する態度を育み自ら規律ある生活を送ることができるよう援助します。 ◇信頼と愛情に基づく共感的な生徒理解に努め、予防的・共感的教育相談を推進し、いじめや不登校への迅速な対応に努めます。 ◇学校・家庭・地域社会が一体となって取り組む体制づくりを整備し、社会参加活動を援助します。 ◇必要に応じて、個別の支援計画を作成し、より細かな支援を実施します。	
6 重点目標を達成するための校内における組織体制	・生徒指導委員会(いじめ防止対策委員会)・生徒支援部会・各学年会・人権教育推進委員会・特別支援推進委員会・いじめ防止等対策検討会議	
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標	
①保護者との連携を密にして、全職員の共通理解・共通行動のもと、身だしなみ・遅刻・授業規律等の学校生活における規範を遵守する態度を育み、自ら規律ある生活を送ることができるよう援助します。 ②信頼と愛情に基づく共感的な生徒理解に努め、予防的・共感的教育相談を推進し、いじめや不登校への迅速な対応に努めます。 ③学校・家庭・地域社会が一体となって取り組む体制づくりを整備し、社会参加活動を援助します。 ④必要に応じて、個別の支援計画を作成し、より細かな支援を実施します。	①生徒・保護者・教員の協議により作成したスマートフォンのルールの定着を図る。遅刻者数へは指導・面談等を行い、減少を目指す。登校指導・交通安全指導を通したマナー向上の徹底を図る。 ②いじめ・迷惑調査や心のアンケート等を即時に分析したり、相談室・保健室等からの情報を共有したりすることで組織での対応に努める。 ③部活動・MSリーダーズ活動・ボランティア活動の一層の活性化と積極的な広報活動を推進する。 ④特別支援教育支援員を配置し、日常生活や学習等における支援を実施する。	
9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価
①本年度はコロナ後であり、単純比較できないが、遅刻者数はほぼ横ばいである。また回数に応じた面談等を実施した。交通事故は減少している。 ②「学校いじめ防止基本方針」を改訂し職員間の共通理解と行動連携を図った。迷惑調査の結果を受けて、全体指導と個別指導の両面で、迅速に対応した。少人数コミュニケーション講座に関して、要特別支援生徒に対し柔軟に対応した。 ③スマホの使用ルールを運用し、情報モラル教育の推進を図った。外部機関と連携したMSリーダーズが交通安全運動等への協力を行った。	①遅刻者数・交通事故件数は減少したか。 ②生徒の把握に努めるとともに、多様な生徒に対応したか。人権意識を高められたか。 ③生徒が主体的に活動したか。	A <input checked="" type="radio"/> B C D A <input type="radio"/> B <input type="radio"/> C D A <input checked="" type="radio"/> B C D
12 成果・課題	○大部分の生徒が携帯電話・スマホの新ルールを遵守した ○いじめアンケートや心のアンケート等を含め、いじめの訴えに対し、即時に対応できた。 ○少人数コミュニケーション講座の開設に伴い、要特別支援生徒に対応する中で様々な課題に柔軟に対応できた。 ○支援員を生徒支援部に位置付け、組織的な支援が出来た。 ▲遅刻・欠席等については継続的な取り組みが必要である。	
13 来年度に向けての改善方策案	・生徒の規範意識、人権意識をさらに高め、「いじめ」が起きにくい環境を作る。 ・遅刻防止の回数指導の方法の改善とともに全校生徒の意識向上のための方策を図る。 ・地域の一員としての自覚を高め、さらに自己肯定感を高めるため、外部機関と連携したMSリーダーズ活動を行う。 ・特別支援教育（個別の教育支援計画、ユニバーサルデザイン）および少人数コミュニケーション講座についてさらなる整備と体制の充実を図る。	

II 学校関係者評価

実施年月日：令和6年2月6日

【意見・要望・評価等】

- ・生徒の言葉から、教職員が生徒の実態に合わせて丁寧な指導をしていることがよく伝わってきた。教職員の方から生徒たちに積極的にコミュニケーションをとろうとする姿が、生徒の範になっているのだろうと思う。
- ・特別に支援を要する生徒への指導・支援をどのように進めるのかについて、学校の課題として取り組んでいることは良い。
- ・学習だけでなく、様々な活動でも生徒の育ちを支援しようと真剣な取組が展開され、生徒たちが胸を張って生きていく力になっていると感じる。

I 自己評価

3 評価する領域・分野	◇進路指導	
4 現状、生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等	・生徒対象のアンケートでは、「生徒に適した進路情報を示し、生徒の可能性を引き出している」「生徒の将来の希望に沿った具体的な進路指導が行われている。」について、2項目ともに70%以上が当てまはると回答している。	
5 今年度の具体的かつ明確な重点目標	◇不破スピリットタイム（FST）を柱としたキャリア教育を推進し、一貫性のある進路指導を実施することにより、自己の適性を的確に把握させた上で進路目標を決定させます。 ◇進路目標につながる類型・科目を選択できるよう努めます。 ◇進路目標を実現させるため、ICTを利用した教材や到達度確認テスト等を活用し、基礎学力の定着を図ります。 ◇学年・担任・学年が緊密な連携を図ることにより、生徒一人一人の勤労観・職業観を育成し、生徒全員の進路実現に努めます。	
6 重点目標を達成するための校内における組織体制	・教務、生徒支援部、進路支援部、各学年主任を中心に、外部リソースとの連携も図りながら、具体的な取組の企画、立案、検証を行う。	
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標	
①不破スピリットタイム（FST）を柱としたキャリア教育を推進し、一貫性のある進路指導を実施することにより、自己の適性を的確に把握させた上で、進路目標を決定させます。 ②進路目標につながる類型・科目を選択できるよう努めます。 ③進路目標を実現させるため、ICTを利用した教材や到達度確認テスト等を活用し、基礎学力の定着を図ります。 ④学年・担任・分掌が緊密な連携を図ることにより、生徒一人一人の勤労観・職業観を育成し、生徒全員の進路実現に努めます。	①地域連携の一環として、垂井町と連携し地元密着型のキャリア教育を充実させる。キャリアプランナーの活用、岐阜協立大学、ハローワーク、保護者等との連携を強化する。 ②進路ガイダンスなどの進路行事や個人懇談を充実させ進路先を見据えた細やかな指導を実施する。 ③ICTを利用した教材の実施時期や活用方法をよく検討し、事前・事後指導を充実させ、到達度確認テストを最大限に活用する。 ④進学・就職内定率100%の達成を目標とする。	
9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価
①1年生のFSTにて、垂井町と連携し「地域探究」を実施し、その成果を発表する機会を設定した。岐阜協立大学との連携で面接指導等を実施した。 ②企業や各種学校にご協力いただき、新たな進路行事を企画し実施することができた。 ③到達度確認テストを予定通り実施した。長期休暇を利用し、事前に課題配信を行った。 ④Microsoft Teamsを活用することにより、学年・担任や生徒との進路情報の共有を充実させることができた。	①生徒のキャリア意識の向上のために外部と連携し企画を実施することができたか。 ②進路行事を通し、生徒たちの進路意識を高めることができたか。 ③事前・事後指導を充実させ、生徒の基礎学力の定着を図ることができたか。 ④生徒や保護者の考えを把握し、進学や就職に関する情報を収集、提供することができたか。	A (B) C D A (B) C D A B (C) D A (B) C D
12 成果・課題	総合評価	
○学年や担任と協力し、生徒の希望やニーズに応じられるような新たな進路行事を企画し、実施することができた。 ○就労意識を高め、卒業後の進路についてと考えられるよう、生徒が企業について知ったり、企業と接することができる機会を多く設定することができた。 ▲生徒が基礎学力の定着を意識し、学習活動を充実させられるよう、FSTの内容を精査し改善し続けていく必要がある。	A (B) C D	
13 来年度に向けての改善方策案	・地域や企業との連携を生徒の学びに位置付け進路行事やFSTの見直しを行っていく。 ・成功体験を積み重ねることで、自信をもって進路実現ができるようにする。	

II 学校関係者評価

実施年月日：令和6年2月6日

【意見・要望・評価等】 ・進路指導も様々な方法を考えて生徒たちが自立できるように取組んでいると感じた。特に、生徒と地元企業と関わる機会が多くあることはとても良いことだと感じた。 ・高校で企業研究を行うことは、進路選択において大変有意義であると思う。今後もこのような取組みを継続してほしい。 ・生徒の希望やニーズに応えられる様々な進路行事について、校外の企業や人材を取り入れることで、視野が広がるので良い。
--